

大阪市東住吉区

矢田部遺跡B地点発掘調査報告

2012.3

財団法人 大阪市博物館協会
大阪文化財研究所

大阪市東住吉区

矢田部遺跡B地点発掘調査報告

2012.3

財団法人 大阪市博物館協会
大阪文化財研究所

序 文

本書は2010年度に行った矢田部遺跡B地点における発掘調査の成果をまとめたものである。本遺跡の周辺を概観すると、北の田辺地域では古墳群の存在が想定され、東西では弥生時代末から古代にかけての集落が検出されている。また、調査地の北を東西に走る長居公園通は古代の幹線道路「磯齒津路」に比定される。こうした歴史的環境のなか、本地域において考古学的な発掘調査に求められる期待は大きい。

今回の調査では、中世以降連綿と続いた耕作のあとを確認することができた。また、耕作には不可欠な水を供給した河川や溝を検出し、自然と人間活動の係わりの一端を把握することができた。さらには、遊離資料ではあるが、埴輪も出土している。今後、周辺地域での発掘調査を重ねることによって、この地域の歴史をさらに表情豊かに描くことができよう。

最後に、発掘調査ならびに報告書刊行に当ってご尽力を賜った大阪市都市整備局をはじめとする関係各機関、ならびに地域住民の皆様に心より感謝の意を表したい。

2012年3月

財団法人大阪市博物館協会
大阪文化財研究所
所 長 長 山 雅 一

例 言

- 一、本書は財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所が2010年度に実施した矢田部遺跡B地点発掘調査(YB10-1次)の報告書である。
- 一、発掘調査と遺物整理、報告書作成の費用は、大阪市都市整備局の負担による。
- 一、発掘調査は財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所次長兼調査課長 南秀雄の指揮のもと、主として同研究所 学芸員 市川創が行った。本書の執筆・編集は南および同研究所 難波宮事務所長 高橋工の指揮のもと、主として市川が行ったが、埴輪についての記述は同研究所非常勤嘱託調査員 白川靖祐が分担した。
- 一、本書の用字・用語や体裁などの調整は、高橋のほか、同研究所総括研究員 趙哲済・同事業企画課長代理 清水和明・同東淀川調査事務所長 佐藤隆からなる校正委員が行った。
- 一、基準点測量は、アジア航測株式会社に委託した。
- 一、遺構写真は市川が撮影し、遺物写真の撮影は楠華堂 内田真紀子氏に委託した。
- 一、発掘調査で得られた遺物・図面・写真などの資料はすべて大阪文化財研究所が保管している。

凡 例

1. 本書で用いた層序学・堆積学などの用語の中で、遺跡の地層に係る特殊な用語については[文化庁文化財部記念物課編2010]に準じる。
2. 本書における遺構名の表記には、溝はSD、井戸はSE、土壇はSK、畦畔はSR、自然河川はNR、その他のものはSXを冠している。遺構番号は遺構の種別に関係のない通し番号としている。
3. 出土遺物には通し番号を付している。
4. 水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文中では「TP+○m」と省略した。また、座標値は「測地成果2000」に基づく。図中の方位は図1が真北を基準に、それ以外は座標北を基準にしている。
5. 本書で用いた地層の土色は標準土色帖[小山正忠・竹原秀雄1970]に拠った。
6. 本書で用いた土器編年と器種名については、埴輪については[川西宏幸1978]に、平安時代の遺物については[佐藤隆1992]に、瓦器については[森島康雄1992]に、瓦質土器については[佐藤1996]に、肥前磁器については[九州近世陶磁学会2000]拠った。本文中では煩雑を避けるため、これらの引用文献をその都度提示することを割愛した。
7. 引用文献は巻末に示した。引用文献は本文中に[筆者または編集発行者 発行年]のかたちで表示するので巻末で検索されたい。また、本文中で引用文献を表記する際、大阪文化財研究所→大文研、大阪市文化財協会→大文協、大阪市教育局委員会→大市教と省略した。

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 発掘調査から報告書刊行に至る経緯と経過	1
1) 発掘調査に至る経緯	1
2) 発掘調査の方法	1
3) 発掘調査の経過	2
4) 報告書作成の経過	2
第Ⅱ章 遺跡の地理的環境と周辺地域の歴史	3
第1節 地理的環境	3
第2節 周辺地域の歴史と既往の調査成果	4
第Ⅲ章 調査の結果	7
第1節 層序	7
第2節 遺構と遺物	10
1) 古代以前の遺構と遺物	10
2) 中世の遺構と遺物	10
3) 徳川期～明治時代の遺構と遺物	15
4) 各地層出土遺物	18
第Ⅳ章 調査成果のまとめ	21
引用文献	23
英文目次	

原色図版目次

- 1 調査区全景(東から)

図版目次

- | | |
|--------------------|------------------|
| 1 地層断面 | 4 中世の遺構(二) |
| 上：調査区北壁地層断面(南西から) | 上：NR401(南から) |
| 中：調査区西壁地層断面(東から) | 下：SD402～404(南から) |
| 下：深掘り地層断面(北から) | 5 徳川期～明治時代の遺構 |
| 2 古代以前の遺構 | 上：第3層上面の遺構(南西から) |
| 上：第7・6c層上面の遺構(東から) | 中：第3層上面の遺構(東から) |
| 中：SK704(東から) | 下：SX201断面(南から) |
| 下：SR6c01・02(南西から) | 6 主要遺物 |
| 3 中世の遺構(一) | |
| 上：第6層上面の遺構(東から) | |
| 下：SR603～605(北東から) | |

挿図目次

- | | |
|-------------------------------|-------------------------------------|
| 図1 矢田部遺跡B地点の位置…………… 1 | 図10 SR6c01・604断面図および写真…………… 12 |
| 図2 調査区と基準点の配置…………… 1 | 図11 SD703出土遺物実測図…………… 12 |
| 図3 大阪市の地形分類図…………… 3 | 図12 第6a層上面・第4層上面の遺構平面図…………… 13 |
| 図4 周辺の遺跡と調査地…………… 5 | 図13 SE606・SD402～404遺構・遺物実測図…………… 14 |
| 図5 明治時代における調査地周辺…………… 5 | 図14 NR401出土遺物実測図…………… 15 |
| 図6 地層と遺構の関係図…………… 7 | 図15 第3層上面・第2層上面の遺構平面図…………… 16 |
| 図7 北・西壁、深掘りトレンチ地層断面図…………… 8 | 図16 NR301・SX201断面図…………… 17 |
| 図8 第7層上面・第6c層上面の遺構平面図…………… 11 | 図17 NR301・SX201出土遺物実測図…………… 17 |
| 図9 第7層上面の遺構断面図…………… 12 | 図18 各層出土遺物実測図…………… 18 |

表目次

- 表1 周辺の主要調査一覧表…………… 4

写真目次

- | | |
|--------------------|-------------------------|
| 写真1 重機による掘削…………… 2 | 写真3 第5層下面の偶蹄類踏込み…………… 9 |
| 写真2 調査のようす…………… 2 | 写真4 第6c層下面の踏込み…………… 9 |

第Ⅰ章 発掘調査から報告書刊行に至る経緯と経過

1) 発掘調査に至る経緯

大阪市東住吉区所在の矢田部遺跡B地点は、大阪市の南部、長居公園の南に位置している(図1)。

このたび当地における埋蔵文化財の確認を行うこととなり、試掘調査(YT09-1次)が実施された。そこでの知見、および周辺での調査状況に基づいて大阪市教育委員会が発掘調査が必要であるとの見解を示し、本格的な発掘調査(YB10-1次)を実施した。発掘調査の実施および報告書の作成は、大阪市の委託を受け財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所が行った。

2) 発掘調査の方法

試掘調査および発掘調査は、図2に示した範囲を対象として行った。

掘削の方法は、近・現代の表土・作土および徳川期の作土については重機を用いて行い、中世の作土層以下の地層については人力に拠った。

重機による掘削にはバックホーを使用し、第1～3層(第三章第1節参照)を対象として行った。その掘削深度は地表面から約0.8mである。掘削に際しては、壁面が崩落しないよう十分な傾斜を確保しつつ法面を整形した。

人力による掘削に際しては、地層の掘下げ作業では遺物の出土に注意しつつ大スコップなどを使用した。遺構の検出が予想される面に至ったのちは、園芸用両刃鎌などを使用して検出面を精査し、遺構・遺物の検出に努めた。検出した遺構は移植ゴテなどを使用して注意深く掘削し、遺構ごとに遺物を取り上げた。



図1 矢田部遺跡B地点の位置

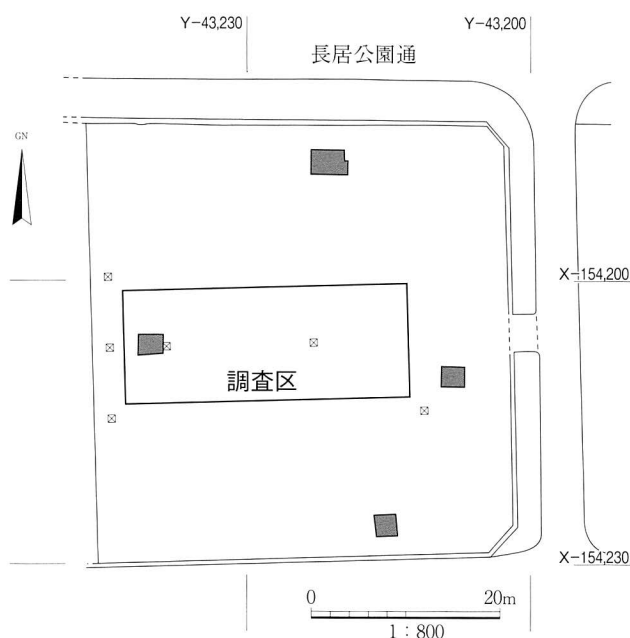


図2 調査区と基準点の配置

(上図の位置は図4参照、網掛けはYT09-1次での試掘位置)

発見された遺構・遺物および堆積層の断面については、写真撮影や平面・断面実測図の作成を適宜行い、記録した。実測図は、平面図では50分の1ないし20分の1、断面図は20分の1の縮尺で作成した。

図根点は世界測地系に則った基準点を専門業者によるGPS測量によって設置し、測量用の基準点は現場の状況に即して適宜に打設した。現場での遺構の写真撮影は担当調査員が行った。

3) 発掘調査の経過

今回の調査面積は360㎡である。2010(平成22)年7月1日から機材搬入などの準備工事を開始した。7月5日から重機による掘削を行い、7月9日以降は第4層以下を対象として人力による掘削を行い、遺構検出・写真撮影・作図などを適宜行った。途中、7月14日には基準点測量を実施した。

これらの作業を終え、8月19日からは重機による埋戻しを行い、場内の復旧を行った。以上の工程を経て、8月23日には現地における作業をすべて終了した。

4) 報告書作成の経過

報告書の作成は2011(平成23)年5月から開始した。現地で記録した図面・写真の整理を行うとともに、現場終了後から順次実施していた遺物の洗浄・復元に加え、実測を行った。遺物の撮影は専門のカメラマンに委託して行った。これらをもとにパーソナルコンピュータを使用して作図・編集を行った。こうした作業と並行して原稿を執筆し、レイアウト完成済みのデジタルデータおよびフィルムを印刷業者に入稿して本書を完成させた。



写真1 重機による掘削



写真2 調査のようす

第Ⅱ章 遺跡の地理的環境と周辺地域の歴史

第1節 地理的環境

南の丘陵群から大阪の市街地へと延びる上町台地は、北を旧淀川である大川で限られ、南は新大和川によって分断されている。当遺跡は、大局的にみればこの上町台地東側の緩斜面に位置する(図3)。ただし、台地上には複数の開析谷が認められ、やや微視的にみた場合、当遺跡は開析谷の肩部分に立地している。また、遺跡の東側には狭山池から北流した西除川の旧河道があり、南北方向に自然堤防を形成している。この自然堤防は一部で西側へ分岐しており、西除川の分流が存在したことを想定できる。

こうした土地条件は遺跡の形成とも深い関係をもち、次節で述べる田辺古墳群や田辺東之町遺跡・矢田2丁目所在遺跡は、調査地東側の微高地に展開する遺跡群である。

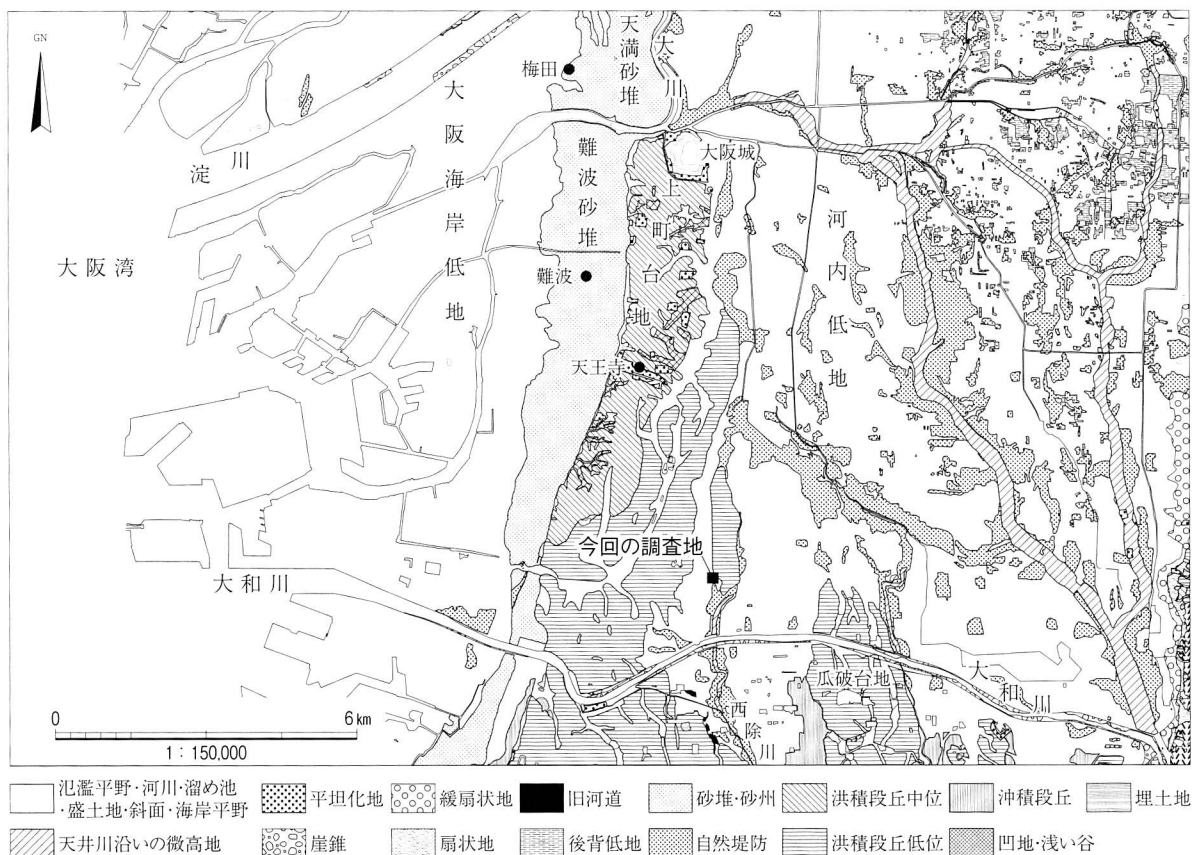


図3 大阪市の地形分類図(土地条件図[建設省国土地理院1983]に一部加筆)

第2節 周辺地域の歴史と既往の調査成果

本節では、今回の調査地の周辺で行われた既往の発掘調査成果を概観する(図4・表1)。

まず調査地の北側には、田辺東之町遺跡や酒君塚古墳が所在する。この2遺跡のほか、より北方の田辺4丁目所在遺跡や桑津遺跡も含めた田辺地域には、「塚」を冠する字名や文献史料から、かつて古墳群が存在したと考えられている[堀田啓一1979]。こうした古墳群の存在を示す発掘調査成果として、酒君塚古墳では川西編年Ⅱ期の埴輪を伴う埴丘盛土が確認されているほか[大市教・大文協2003b]、桑津遺跡から田辺東之町遺跡にかけては、遊離資料ではあるが各調査において埴輪が出土している。現状の発掘調査成果から、この地に古墳群が存在した蓋然性は極めて高いといえよう。こうした古墳に関する知見のほか、酒君塚古墳の下層では弥生時代末～古墳時代前期の古土壌が確認されており、またTH85-4次調査では古墳時代の竪穴建物を検出するなど、弥生時代終末期から古墳時代にかけて、当該地域の開発が進んだことが推測できる。また古代では、TH86-1次・86-5次の両調査において奈良時代の井戸・溝を検出しているほか、TH89-3次調査で土師器甕を蔵骨器とする平安時代の火葬墓を検出している[大文協1998]。中世では、難波大道跡において現在の敷地とは異なる正南北方向の溝を検出している[大市教・大文協2003a]。溝は幅1.8～2.0mで、14～15世紀に機能した遺構である。四天王寺周辺では古代の条坊が中世まで踏襲されていることとも相まって[高橋工2010・市川創2011]、重要な成果である。なお古代の幹線道路については、南北に走る難波大道のほか、住吉大社を西限として現在の長居公園通を東行する「磯齒津路」が想定されているが[新修大阪市史編纂委員会1988]、いまだ考古学的な知見は得られていない。

調査の西側に所在する矢田部遺跡では、弥生時代末の溝のほか、平安時代の掘立柱建物を検出した。そのほか、遺構には伴っていないが、初期須恵器が出土している[大文協1987]。

表1 周辺の主要調査一覧表

遺 跡 名	次 数	調査面積 (㎡)	文献	調 査 成 果 の 概 要
田辺東之町遺跡	TH85-4	72	大市教・大文協1987	古墳時代：竪穴建物を検出したほか、埴輪(V期)出土
	TH86-1	50	大市教・大文協1988a	奈良時代：井戸を検出
	TH86-5	46	大市教・大文協1988b	奈良時代：溝を検出
	TH89-3	255	大文協1998	縄文時代：石鏃出土 古墳時代：布留式土器、埴輪(Ⅱ期)出土 平安時代：火葬墓を検出
難波大道跡	ND01-6	24	大市教・大文協2003a	中世後期：正南北の溝を検出
酒君塚古墳	SA01-2	50	大市教・大文協2003b	弥生時代末～古墳時代前期：古土壌を検出 古墳時代：Ⅱ期の埴輪を伴う埴丘盛土を確認
矢田2丁目所在遺跡	YT97-1	45	大文協1999	古墳時代：竪穴建物・土壙・溝を検出 飛鳥時代：土壙・溝を検出
	YT98-1	45	大市教・大文協2000	古墳時代：井戸・土壙を検出 飛鳥時代：土壙・溝を検出
矢田部遺跡	MN86-41	177	大文協1987	弥生時代末：溝を検出 平安時代：掘立柱建物を検出

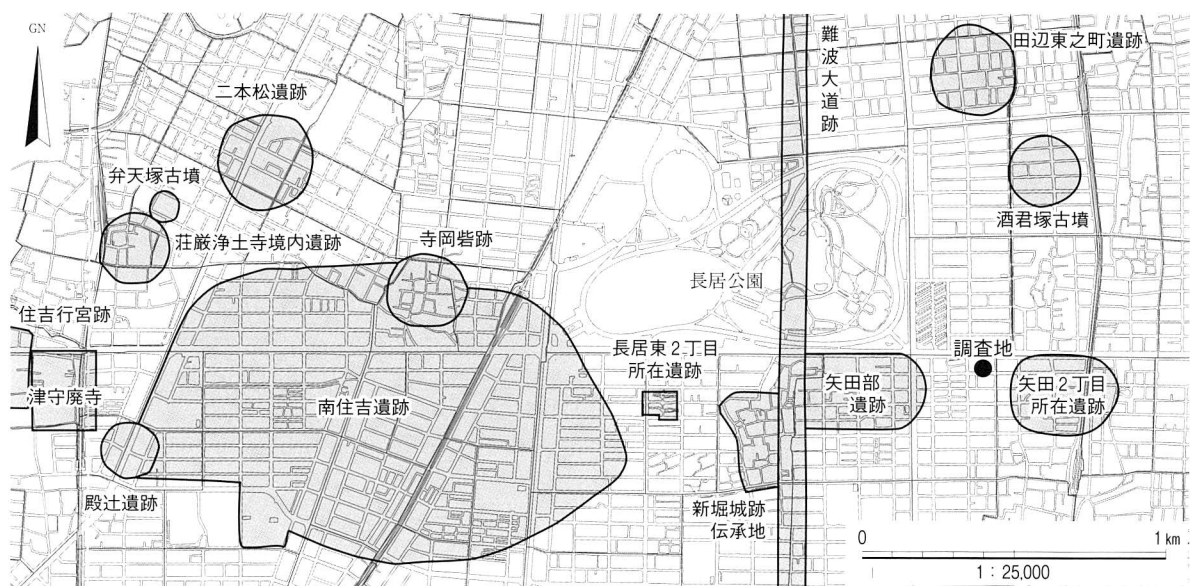


図4 周辺の遺跡と調査地
(遺跡範囲は大阪府地図情報システム上の「埋蔵文化財」(平成23年12月現在)を利用)

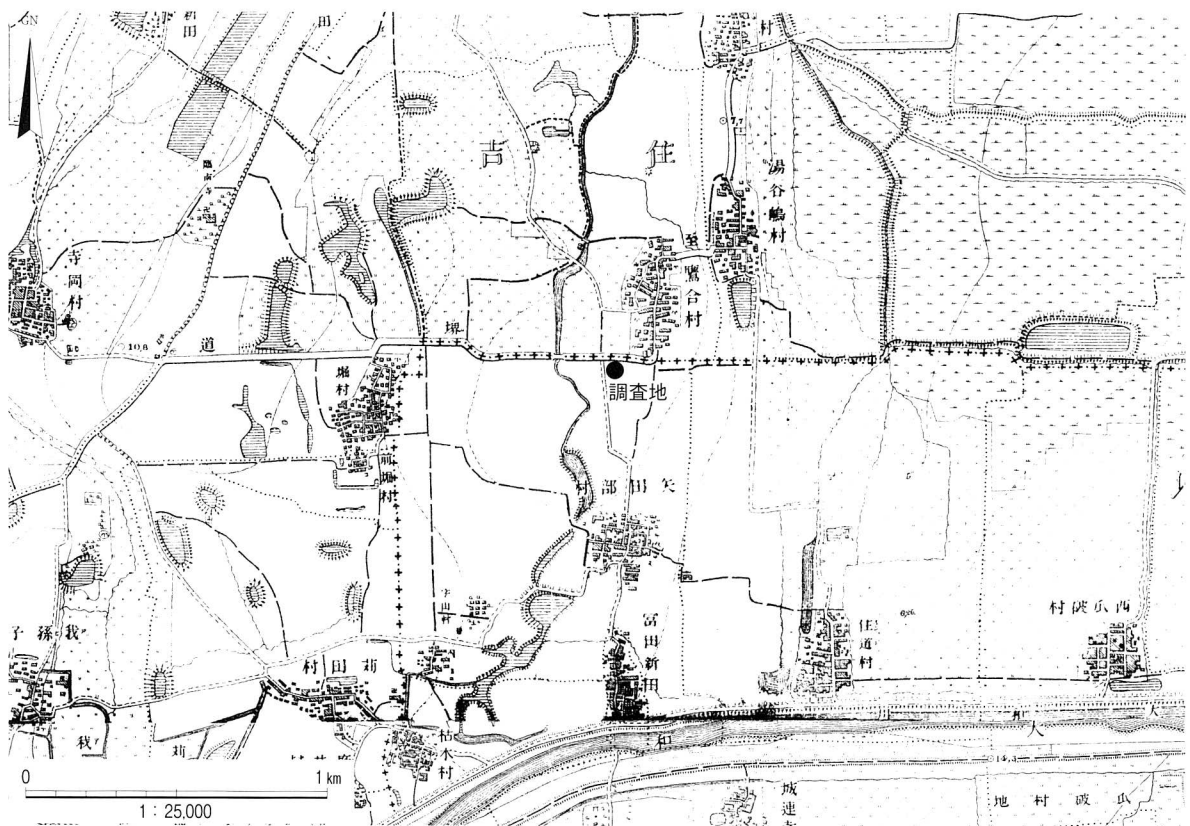


図5 明治時代における調査地周辺
(明治19~20年測量の1:20000仮製地形図より)

東側に位置する矢田2丁目所在遺跡では、古墳時代中期後半では竪穴建物・井戸・土壙・溝など、飛鳥時代では土壙・溝を検出している[大文協1999、大市教・大文協2000]。

なお、17世紀以前において、当地周辺の水系は狭山池からの導水に大きく依存するものであった。しかしこの状況は、1704(宝永元)年に行われた大和川の付替えによって、今回の調査地の東方を北流していた西除川が新大和川によって流路を遮断されたことにより一変した。これに伴い、18世紀以降は当地域で溜池・井戸の果たす役割が増大したという[平凡社地方資料センター1986]。そうした18世紀～近代における当地一帯の景観は、図5に示した明治時代の地図によって窺い知ることができる。

第Ⅲ章 調査の結果

第1節 層序

現地地表下480cmまでの地層を確認し、第1～7層に区分した。以下に各地層の特徴を記述する(図6・7、図版1)。

第1層：現代の整地層で、ガラス・コンクリートなどを含む。層厚は約60cmである。

第2層：調査区全体に分布する作土層で、暗褐色(10YR3/4)の砂質シルトからなる。層厚は最大15cmである。本層の上面で溝ないし溜池SX201を検出した。重機によって掘削したため詳細な時期は不明であるが、本層の時期は幕末～明治時代であろう。

第3層：徳川期の作土層で、第3a・b層に2分することができた。第3a・b層とも、NR301・SX201によって削剥される部分を除き調査区全体に分布した。このうち上位の第3a層は、褐色(10YR4/6)の細礫質中粒砂質シルトからなり、層厚は10cmである。上面でNR301を検出した。下位の第3b層は、明褐色(7.5YR5/6)の中粒砂質シルトからなり、上部にはマンガンの結核が観察できた。層厚は20cmである。第3層からは土師器・瓦器・瓦のほか、18世紀の肥前磁器が出土している。

第4層：第5層を耕起した中世の作土層であり、第4a・b層に2分することができた。上位の遺構に削剥される部分を除き、調査区全体に分布した。このうち上位の第4a層は黄褐色(10YR5/6)を呈するシルト質細粒砂からなり、層厚は最大で8cmであった。上面でNR401を検出したほか、NR401から氾濫した堆積物を切り込む溝状遺構SD402～404がある。下位の第4b層はにぶい褐色(7.5YR5/3)の細粒砂質シルトからなり、層厚は最大で28cmであった。第4層からは土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・備前焼・中国産青磁・瓦が出土した。

第5層：中世前期の氾濫堆積層で、上位の遺構に削剥される部分を除き調査区全体に分布した。調査区の中央部で薄く、東西端ほど厚く堆積しており、層厚は最大で48cmであった。調査区の西半ではオリーブ褐色(2.5Y4/3)の中粒～粗粒砂からなり、南北方向の古流向を示すトラフ型斜交ラミナが観察できるとともに、全体として正級化していた。調査区東半では褐色(7.5YR4/6)の極細粒～粗粒砂からなる。東→西の古流向を示すフォアセットラミナおよび南北方向の古流向を示すトラフ型斜交ラミナが観察できた。また本層の下面では、偶蹄類による踏込みが認められた(写

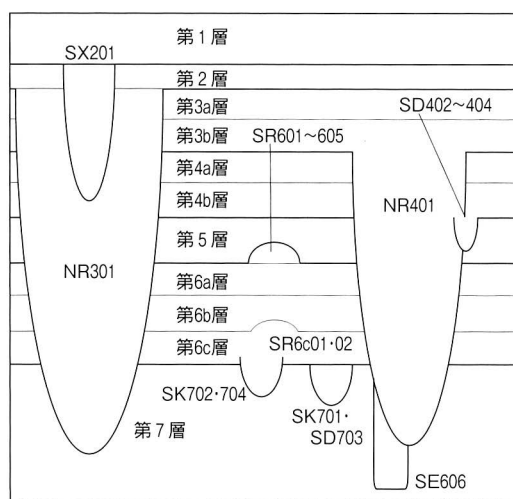


図6 地層と遺構の関係図

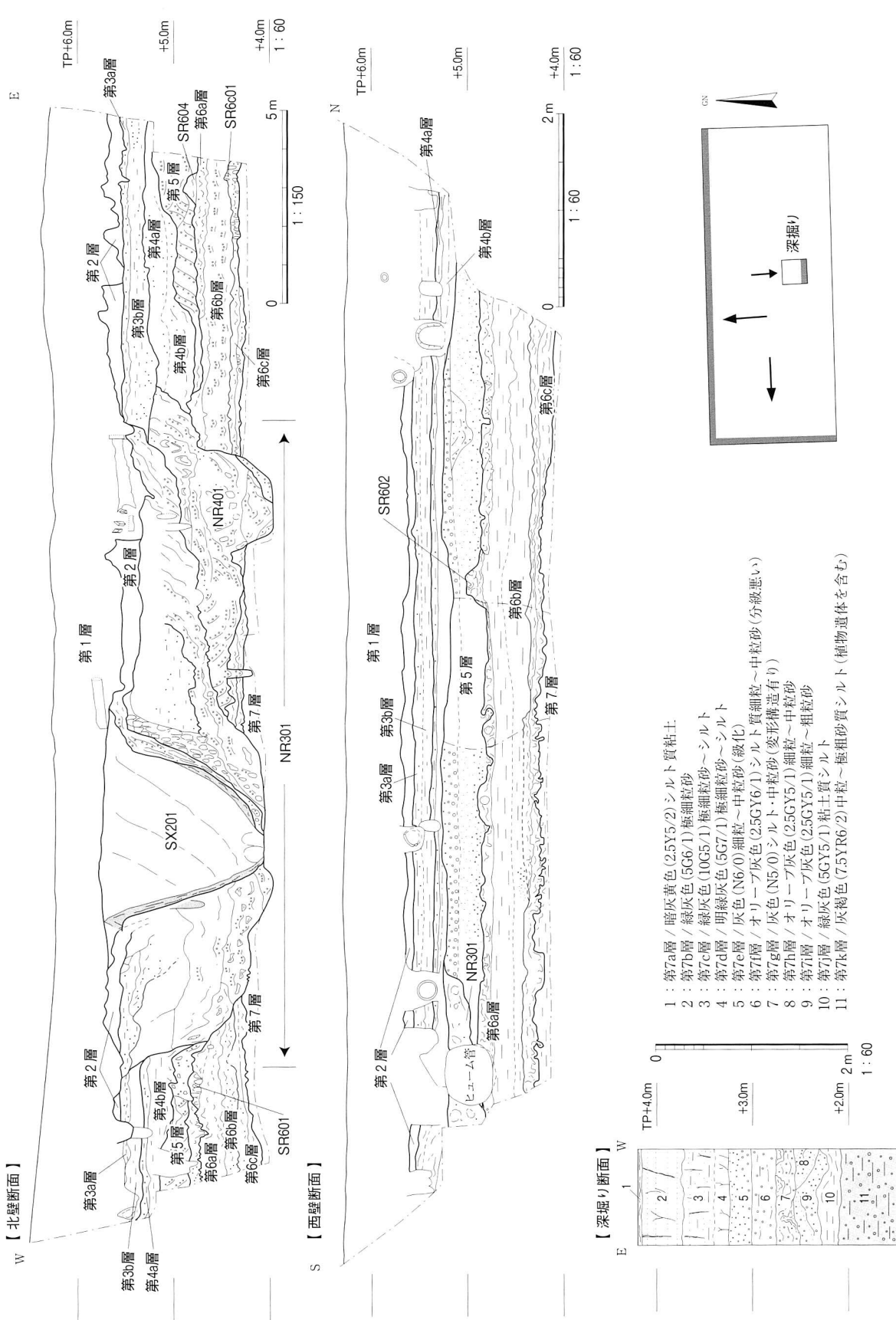


図7 北・西壁、深掘りトレンチ地層断面図

真3)。本層からは土師器・須恵器・瓦器が出土している。

第6層：古代～中世前期の作土層で、第6a～6c層に3分でき、上位の遺構に削剥される部分を除き調査区全体に分布した。このうち最上位の第6a層は、褐色(10YR4/6)のシルト～極細粒砂からなり、層厚は4cmである。上面ではSR601～605を検出したほか、本層に帰属すると考えられる遺構としてSE606がある。本層からは土師器・須恵器・瓦器が出土した。第6b層は灰黄褐色(10YR4/2)の細粒砂質シルトからなり、酸化鉄の斑紋が認められた。層厚は24cmで、土師器・須恵器・円筒埴輪が出土している。第6c層は黄褐色(2.5Y5/3)のシルト質細粒砂からなり、下部には第7層の偽礫が含まれていた。層厚は最大で9cmであり、下面には動物の踏込みによると思われる擾乱が認められた(写真4)。本層の上面ではSR6c01・02を検出した。第6c層からは土師器・須恵器が出土し、このうち須恵器には7世紀に属する資料が含まれた。

第7層：段丘構成層であり、層厚は272cm以上ある。第7a～7k層に細分でき、このうち第7b層以下は深掘りトレンチで確認した。第7b～7d層では裂痕が観察できたほか、第7k層には植物遺体が含まれた。第7g層では地層が変形しており、大型動物などの踏込みによる可能性を考えたが、確定できなかった。第7層上面では、SK701・702・704、SD703を検出した。



写真3 第5層下面の偶蹄類踏込み
(レンズキャップの直径は6.7cm)

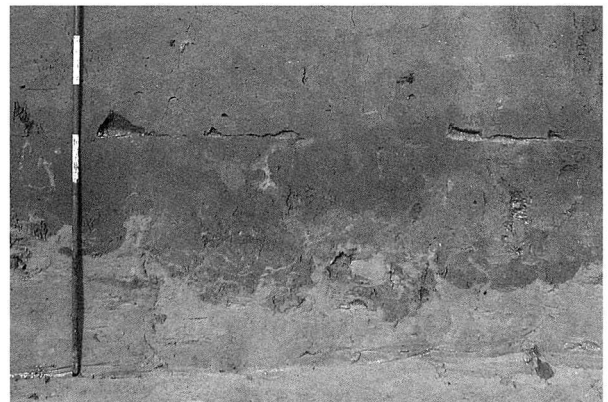


写真4 第6c層下面の踏込み

第2節 遺構と遺物

1) 古代以前の遺構と遺物

第7層の上面でSK701・702・704・SD703を、第6c層の上面でSR6c01・6c02を検出した(図8・図版2)。

SK701 調査区の中央部で検出した土壌である。遺構の規模は南北・東西とも0.6m以上あり、南半は後述するSD301によって破壊されていた。検出面からの深さは0.1mで、細粒砂の偽礫を含むシルト質細粒砂で埋まる(図9)。当遺構からは土師器・須恵器が出土した。

SK702 調査区の中央部で検出した土壌である。直径0.5mの円形を呈し、検出面からの深さは0.3mであった。埋土は第6層由来の偽礫を含む加工時形成層が下部にあり、その上位には第7・6層の偽礫を含む細粒砂質シルトがある(図9)。加工時形成層に第6層由来の偽礫を含むことから、本来は第6層から掘り込まれた遺構である。当遺構から遺物は出土しなかった。

SK704 調査区の西部で検出した土壌である。東西に長い楕円形を呈し、長径は1.8m、短径は1.1mである。検出面からの深さは0.2mで、埋土は第6c層由来の偽礫を含むシルト質粘土である(図9)。当遺構からは須恵器が出土している。

SD703 調査区の中央部で検出した溝状の遺構である。南北に長く、長さ4.7m、幅0.6mで、検出面からの深さは0.1mであった。埋土は下部がシルト質細粒砂、上部が粗粒砂である(図9)。当遺構からは土師器・須恵器のほか、サヌカイト製の石鏃1が出土した(図11)。1は細長い凹基無茎式石鏃で、逆刺が比較的鋭いB-1類に分類できる[菅榮太郎1995]。寸法は長さ1.86cm、幅1.46cm、厚さ0.35cmで、重さは0.6gを測る。先端部には遺構に埋没する以前の欠損が観察できる。形態的特徴から、縄文時代早～後期に属する資料である。

SR6c01・6c02 調査区の西部で検出した水田畦畔である。南北に延びるSR6c01に、東西方向のSR6c02が接続する。SR6c02の西部は第6b層に削剥されて失われており、水田のプランを明らかにすることはできなかった。SR6c01は下幅0.9m、残存高0.1mで、第6c層を削り出して形成されていた(図10)。

以上の遺構は、明確に時期を決定できる要素に乏しいが、第7層上面の遺構から須恵器が出土していること、第6b層から7世紀の須恵器が出土していること、および第6a層から瓦器が出土していることから、古墳時代中期～古代に位置づけられよう。

2) 中世の遺構と遺物

第6a層の上面でSR601～605を、第4層の上面でNR401・SD402～404を検出した。またSE606はNR401の基底面で検出したが、第6層に伴うと考えられる遺構である(図12、図版3・4)。

SR601・602 調査区の西部で検出した畦畔であり、南北に延びるSR601に、東西方向のSR602が接続する。第6a層を盛り上げて造成されており、水成層である第5層に覆われていた。SR601は長さ

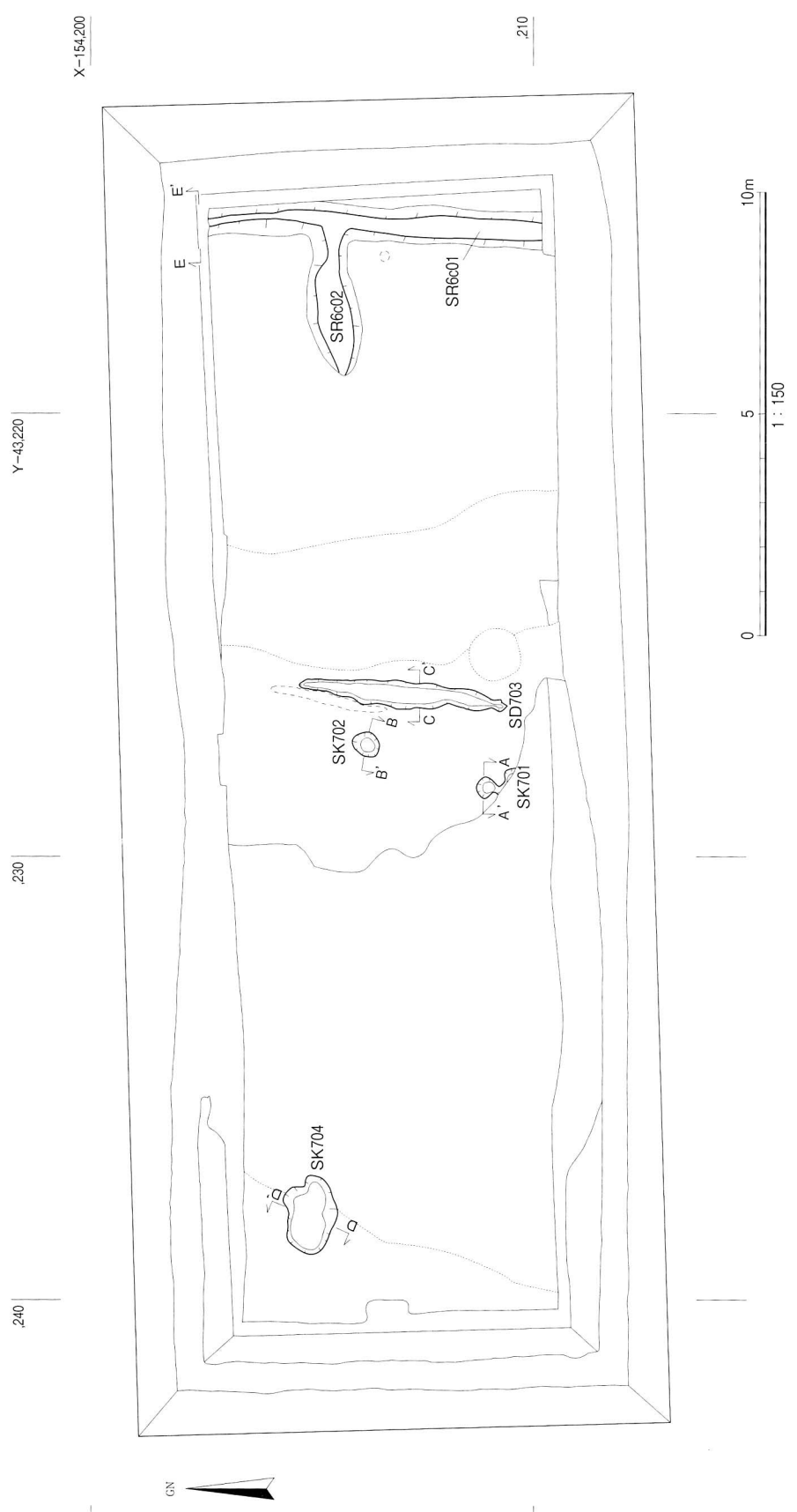


図8 第7層上面・第6c層上面の遺構平面図

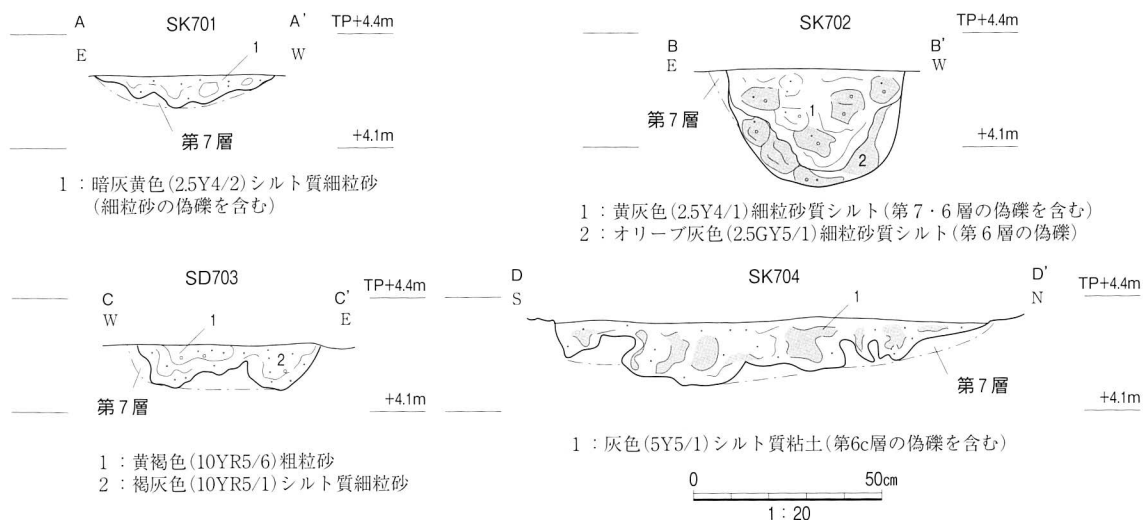


図9 第7層上面の遺構断面図

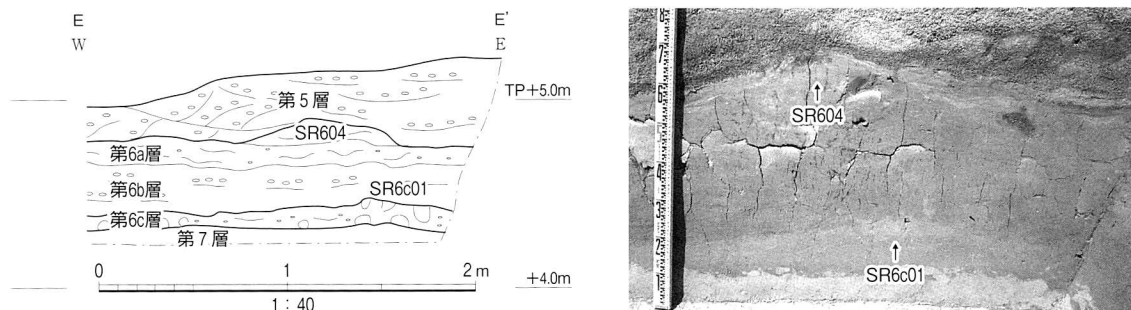


図10 SR6c01・604断面図および写真

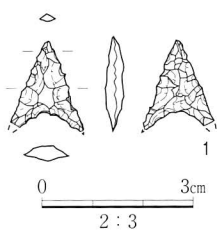


図11 SD703出土遺物実測図

3.6m以上、下端の最大幅0.7m、高さ0.1mで、SR602は長さ2.0m以上、最大幅0.6m、高さ0.2mの規模である。

SR603～605 調査区の東部で検出した畦畔であり、南北に延びるSR603・604に、東西方向のSR605が接続する。SR601・602と同様、第6a層を盛り上げて造成され、第5層に覆われていた(図10)。このうちSR603は長さ7.8m以上、下端の最大幅1.2m、高さ0.2mで、西半は後述するNR401によって破壊されていた。SR604は長さ7.7m以上、最大幅0.7m、高さ0.1mであった。SR605は長さ4.7m、最大幅1.0m、高さ0.1mであった。これらSR603～605によって囲まれる水田1筆の面積は36.4㎡以上となる。

SE606 調査区の中央部で検出した井戸である。上部はNR401によって削剥されていたため、検出層準は第7層上面である。直径は1.2m、検出面からの深さは4.4m以上ある(図13)。TP+2.8m以下では木製井戸枠の痕跡がみられたが、壁面崩落の可能性があったため詳細な観察は断念した。埋戻し土には第6層由来の偽礫を多く含む一方で、第5層に由来する堆積物は含まれていない。このため、当遺構が第6層に属すると考えた。遺物は須恵器片が出土したが、時期は判別できない。

NR401 調査区の東半で検出した南北方向の自然流路である。長さ7.5m、幅3.8mあり、検出面からの深さは1.2mであった。下部は水成の砂質シルト、上部はシルトの偽礫を含むシルト質砂で埋まっ

ていた。上部の砂層はオーバーフローし、若干側方細粒化しつつ当遺構の周辺を覆っていた。当遺構からは、土師器・須恵器・埴輪・黒色土器・瓦器・瓦質土器・瓦・サヌカイト片が出土し、このうち土師器5・8・11・12、須恵器10、瓦器9、瓦質土器13、瓦14・15を図示した(図14)。7・10は遺構の下部から、それ以外は上部から出土した資料である。土師器皿5・6のうち、5は口径9.2cmで、口縁端部内面を窪ませる。6は口径11.5cmで、口縁端部を屈曲させるいわゆる「て」の字口縁の皿である。7・8は椀で、貼付けの高台の断面は三角形状を呈する。高台部11は円形の穿孔を有する。12は甕で、口縁端部に面を有する形態である。須恵器の杯B10は12.8cmと比較的高台径が大きく、かつ高台は底部のやや内側に貼り付けられている。瓦器椀9は深い形態で、外面のヘラミガキはやや退化しているが、内面のヘラミガキは密である。瓦質土器の播鉢13は片口を有し、外面調整はヘラケズリである。内面はハケで調整したのち、播目を施している。平瓦14は凹面に布目、凸面に縄目タタキが観察できる。丸瓦15の凹面にも布目が残る。

これらのうち遺構の時期を推測できる資料として、まず下部から出土した資料では7が11世紀前半頃、9が12世紀前半頃に位置付けられよう。上部出土資料では、13が16世紀までのものである。したがって、当遺構はおおむね下半が12世紀前半まで、上半が16世紀までの時期に堆積したと考えられる。

SD402～404 調査区の中央部、NR401の西側で検出した溝である(図13)。SD402・404はNR401からオーバーフローした砂層内から掘り込まれており、SD403はSD402に破壊される。

このうちSD402は南北方向に延び、長さは7.2m以上あり、南部はNR301によって破壊されていた。幅は0.2m、検出面

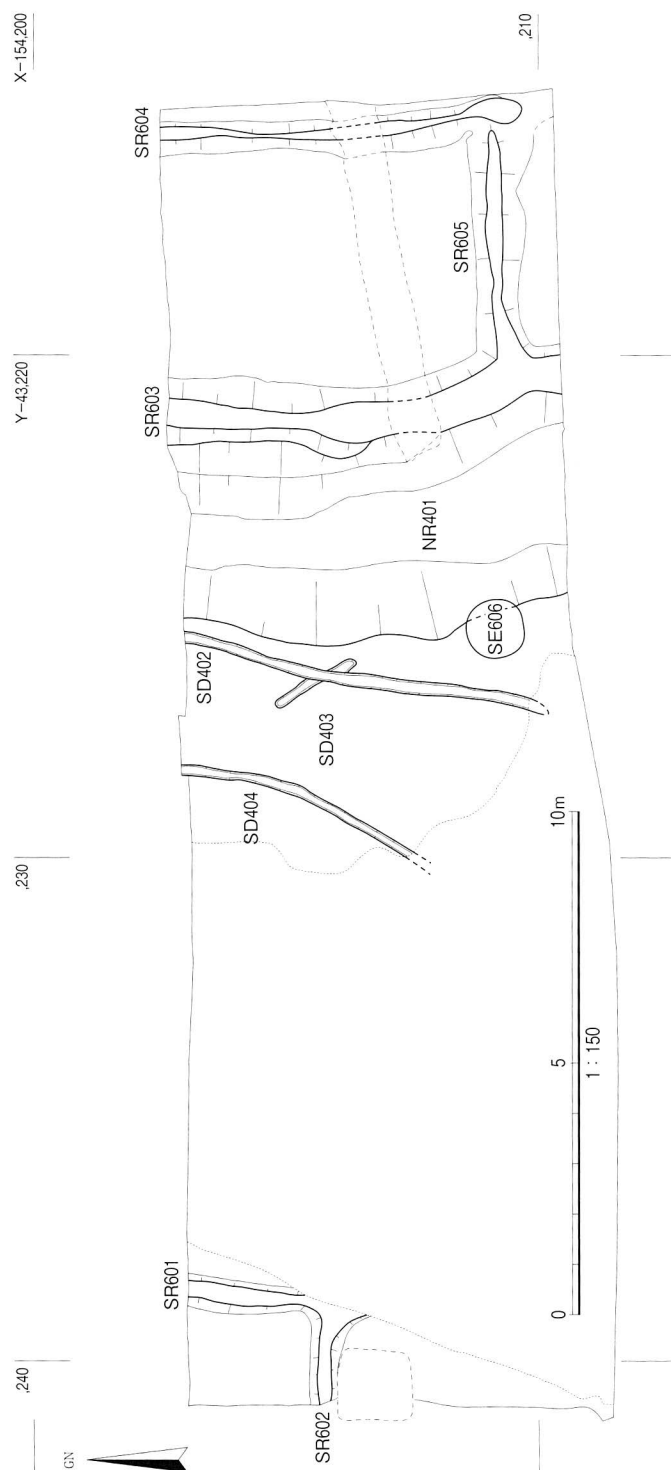
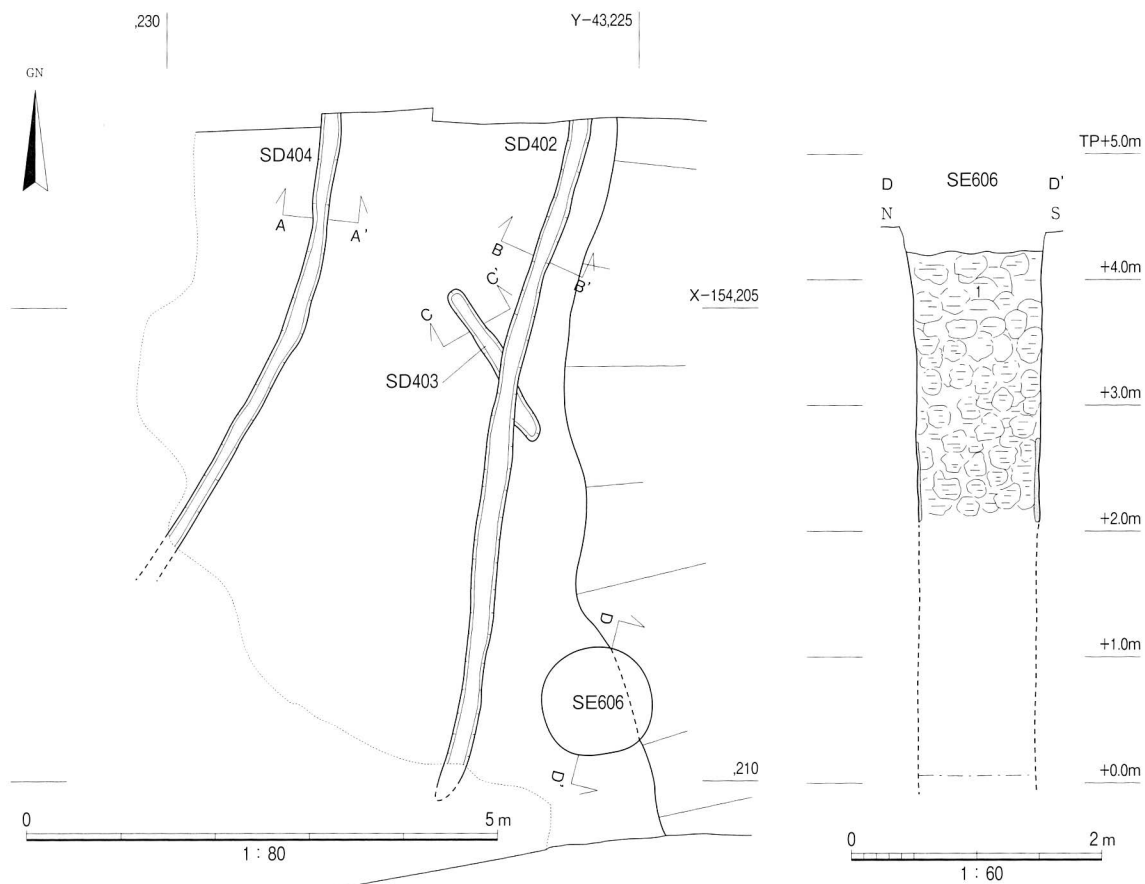
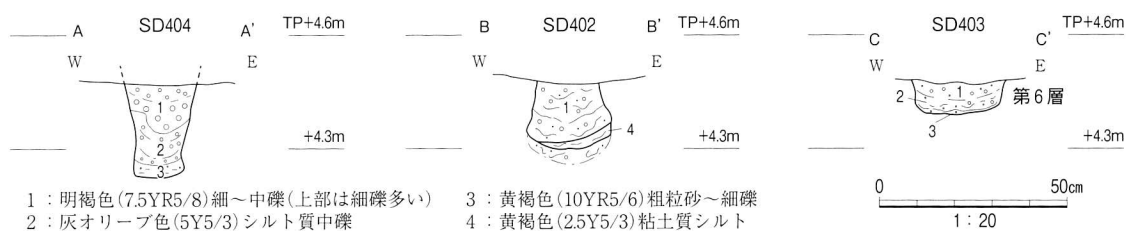


図12 第6a層上面・第4層上面の遺構平面図



1 : 灰色(5Y4/1)細粒砂質シルト
(第6層の偽礫を多く含む)



1 : 明褐色(7.5YR5/8)細～中礫(上部は細礫多い)
2 : 灰オリーブ色(5Y5/3)シルト質中礫

3 : 黄褐色(10YR5/6)粗粒砂～細礫
4 : 黄褐色(2.5Y5/3)粘土質シルト

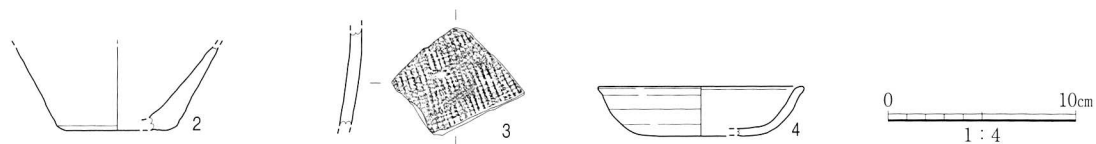


図13 SE606・SD402～404遺構・遺物実測図
SD402(3)、SD404(2・4)

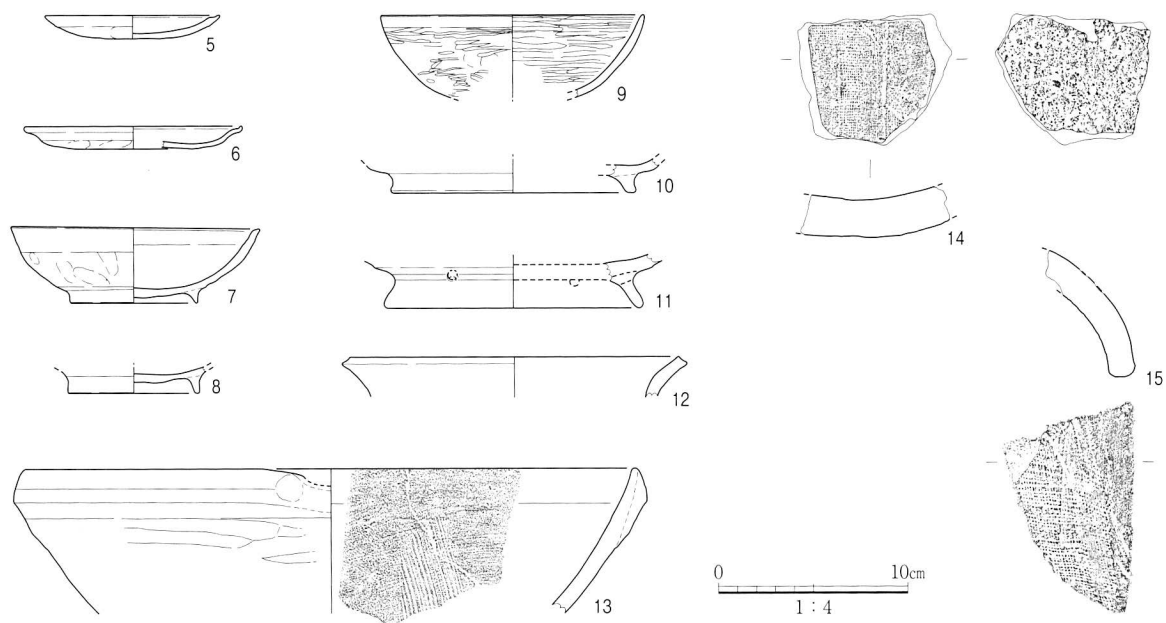


図14 NR401出土遺物実測図
下部(7～10)、上部(5・6・11～15)

からの深さは0.15mである。断面形状はややオーバーハングしており、埋土は下部に水漬きの粘土質シルトがあり、細～中礫で埋っていた。当遺構からは弥生土器・土師器・須恵器・瓦器が出土し、このうち外面に格子タタキを施す初期須恵器3を図示した(図13)。SD403はSD402と斜交して北西－南東方向に延びる。長さ1.8m、幅0.2mで、検出面からの深さは0.1mであった。遺物は出土していない。SD404は南北方向に延び、南部はNR301によって破壊される。長さ4.8m以上、幅0.2mで、検出面からの深さは0.2mである。埋土は下位が粗粒砂～細礫、中位がシルト質中礫、上位がSD402と同質の細～中礫であった。当遺構からは弥生土器の底部2および土師器杯4が出土している(図13)。

SD402と404が平行するようにもみえること、また垂直に近い、あるいはオーバーハングする断面形態から当遺構が轍などの痕跡である可能性を考えたが、積極的な証拠は得られなかった。

3) 徳川期～明治時代の遺構と遺物

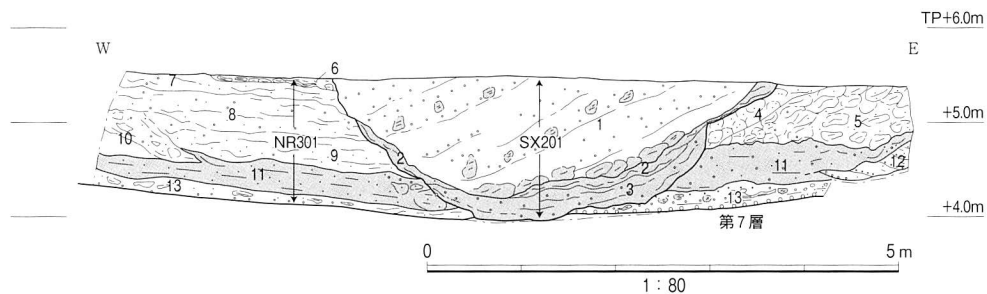
第3層の上面でNR301を、第2層の上面でSX201を検出した(図15・図版5)。

NR301 調査区の中央部を南北に延びる自然流路である。長さ10.0m以上、幅15.0m、検出面からの深さは1.3mあり、下位の遺構を大きく削剥していた。埋土は最下位に上方細粒化する中粒砂～細礫があり(図16～13層)、その上位にわずかに粗粒砂の偽礫を含む中粒砂質シルトが堆積する(同11層)。13/11層間には、東部で砂質シルト(同12層)が挟在した。これら13～11層は比較的分级がよく、機能時の自然堆積層であると考え。その後、第3層の偽礫を含む4～6層によって、当遺構は埋め立てられていた。当遺構は溝としてはかなり大規模であり、自然流路の可能性が高いと考える。

当遺構からは、土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・丹波焼・肥前陶器・肥前磁器・中国産青磁・ミニチュア土製品・瓦埴類が出土した。このうち瓦器16、中国産青磁17、瓦質土器19、土師器20、丹波焼21、瓦埴22・23、ミニチュア土製品25を図示した(図17)。瓦器碗16は表面の磨滅が激しく調整は不明であ



図15 第3層上面・第2層上面の遺構平面図



【SX201】

- 1：褐色(10YR4/6)砂礫(砂質シルトの偽礫を含む)
2：オリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルト(3よりシルト分多い)
3：灰色(5Y4/1)砂質シルト

【NR301】

- 4：黄灰色(2.5Y6/1)細礫質シルト(第3層の偽礫を含む)
5：暗灰黄色(2.5Y5/2)細礫質シルト(第3層の偽礫を含む)
6：明黄褐色(2.5Y6/6)砂質シルト(第3層の偽礫を含む)
7：暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルト
8：明褐色(7.5YR5/6)砂質シルト
9：明黄褐色(2.5Y6/6)砂質シルト
10：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質砂
11：黒褐色(2.5Y3/1)中粒砂質シルト(粗粒砂の偽礫を含み、下部ほど細粒)
12：明褐色(7.5YR5/6)砂質シルト
13：青灰色(5BG5/1)中粒砂～細礫(上方細粒化、上半にはシルトの偽礫を含む)

図16 NR301・SX201断面図

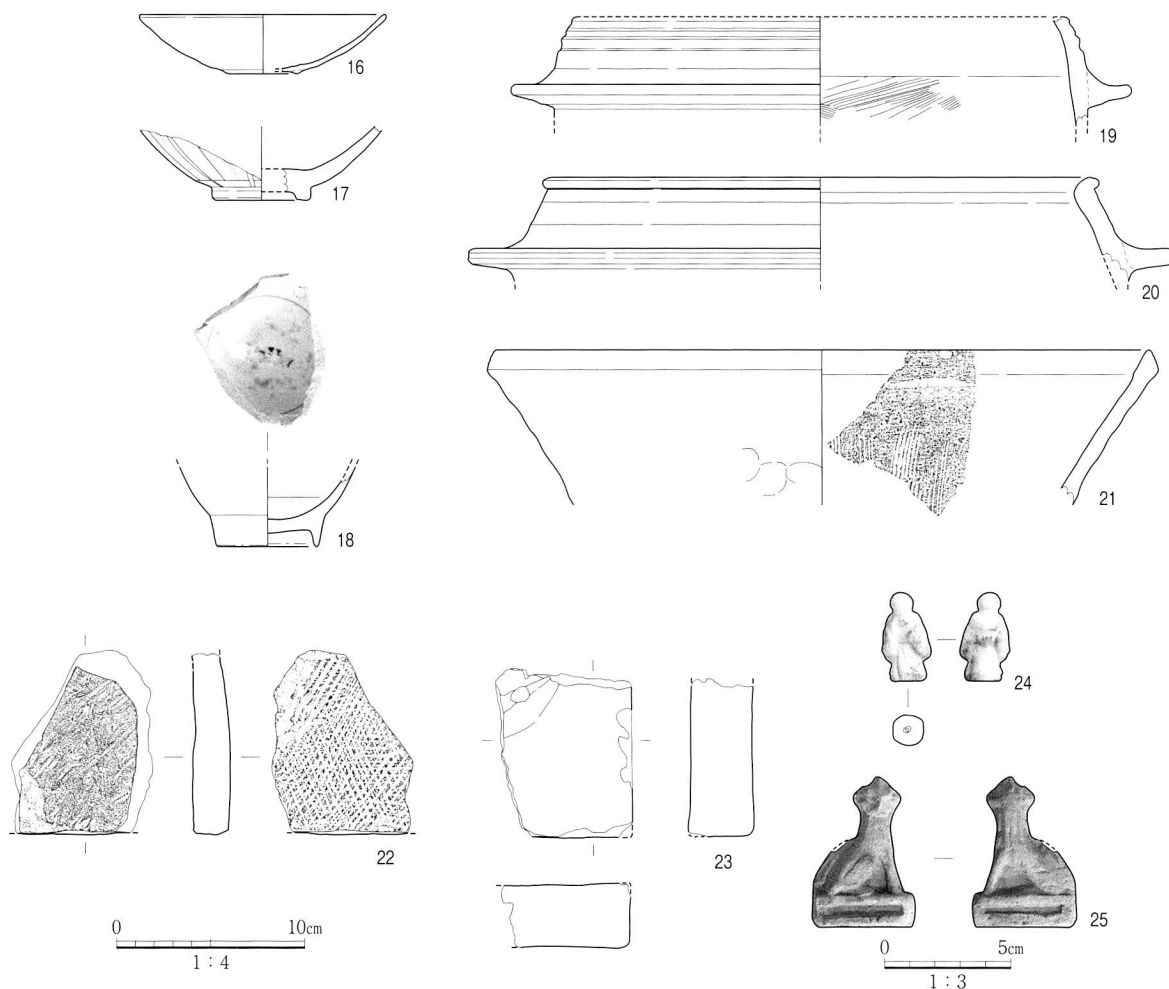


図17 NR301・SX201出土遺物実測図

NR301(16・17・19～23・25)、SX201(18・24)

るが、形態からみて13世紀に属する資料である。17は龍泉窯系の蓮弁文碗である。羽釜19・20のうち瓦質土器の19は口縁部が緩く内傾する形態である。播鉢21は櫛状工具で播目を施しており、口縁部は拡張せず断面が三角形を呈する。17世紀前半の資料である。平瓦22は凸面に斜格子タタキを施す。23は残存する各面が平坦であり、塼であろう。型合わせの25は犬を象ったものであり、18世紀以降の資料である。これらNR301の出土資料には16をはじめとする中世前期のほか、古墳時代に遡る資料も含まれるが、第3層の時期が徳川期に降ることから、少なくとも17世紀以降に機能した遺構である。その下限は明らかにしがたいが、25などが出土していることから18世紀以降であるといえる。

SX201 NR301上に掘削された遺構で、長さ10.0m以上、幅は4.6mである。検出面からの深さは1.5mで、最深部は段丘構成層である第7層にまで達していた。埋土は下部に滞水を示す砂質シルトが堆積し、上部は砂質シルトの偽礫を含む砂礫によって埋め立てられていた(図16)。なお、埋立てに際しては東側から土を投入していた。埋土の状況および図5に示した明治時代の周辺状況を参考にすれば、当遺構は灌漑用の溜池ないし水路であろう。

当遺構からは、須恵器・瓦器・備前焼・肥前陶器・関西系陶器・肥前磁器・瀬戸美濃焼磁器・ミニチュア土製品・瓦が出土し、このうち肥前磁器18、ミニチュア土製品24を図示した。染付の広東碗18は18世紀末以降の資料、磁胎の24は明治時代に降る資料である。

4) 各地層出土遺物

第6b層および第4層出土資料を図示した(図18)。

第6b層出土資料のうち、26は土師器の杯Cであり、外面にはわずかにヘラミガキの痕跡が確認でき

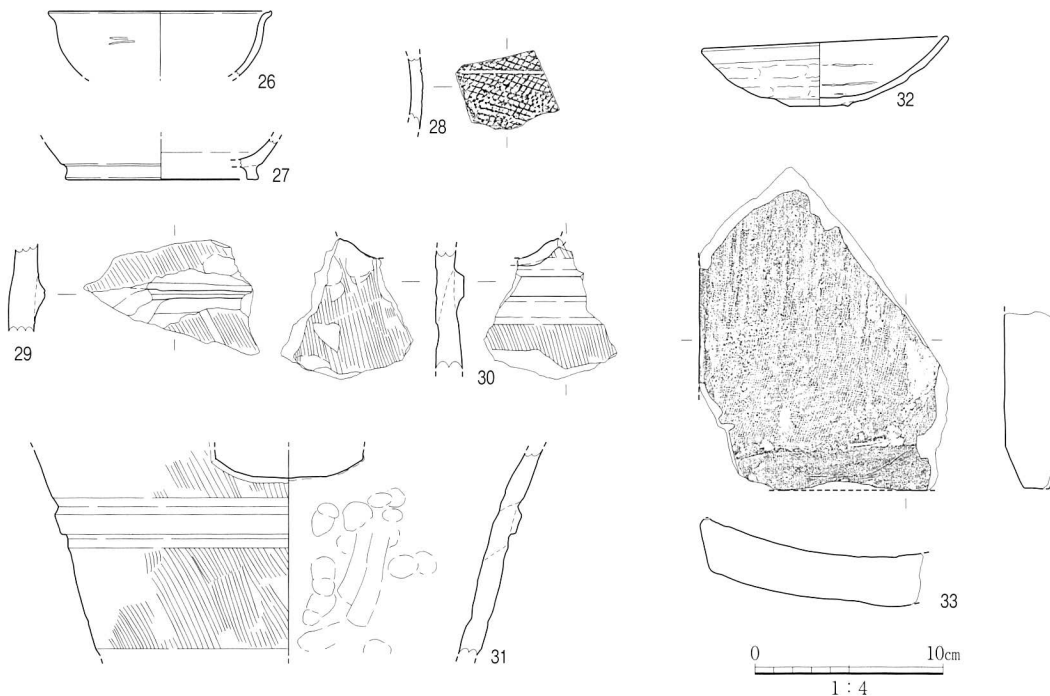


図18 各層出土遺物実測図
第6b層(26～31)、第4層(32・33)

る。27は須恵器の杯B、28は初期須恵器で、外面には格子タタキの上から沈線を施す。29～31は円筒埴輪であり、胎土はいずれもやや粗く、直径1～2mmの砂粒が混じる。このうち29は、突帯の断面形が低い三角形を呈し、外面はタテハケ調整である。色調は灰白色を呈する。30の突帯は断面形が低い台形を呈する。円形と思われるスカシ孔が穿たれ、調整は内面・外面ともにタテハケである。色調は浅黄橙色を呈する。31の突帯断面は低いM字形を呈し、横長の楕円形と思われるスカシ孔が穿たれている。29～31はいずれもV期に属すると考えられる。こうした埴輪をはじめとして、第6b層からは古墳時代の遺物も出土しているが、27が含まれるため、地層の時期は少なくとも奈良時代まで降る。

第4層出土資料では、瓦器碗32および平瓦33を図示した。32は浅い形態で、ヘラミガキがほとんど施されず、高台形態も退化している。13世紀後半頃の資料で、地層の時期の一端を示している。33は凹面・凸面とも布面痕を有し、凸面にはわずかに縄目タタキの痕跡を確認できる。

第Ⅳ章 調査成果のまとめ

以下、今回のおもな調査成果を時代の古いものから順に述べる。

今回の調査地でもっとも古い遺物は縄文時代の石鏃である。ただ、人間活動の痕跡が遺構として確認できるのは、早くとも古墳時代中期以降である。調査地東方の矢田2丁目所在遺跡、西方の矢田部遺跡で確認されているような弥生～古墳時代の顕著な遺構は確認することができず、この時期の集落が小規模なものであったことを示している。

その後は、中世から明治時代に至るまで、基本的には耕作地として利用された。こうした耕作地としての利用にも係わって、特筆される遺構として各時代の自然流路や溝、ないし溜池の存在がある。とりわけ徳川期のNR301、明治時代のSX201は新大和川の開削によって南方からの水の供給が遮断された後に機能した遺構であり、調査地周辺の耕作地を潤した水源であったと推測される。

当地一帯は、調査地北方を中心として古墳群の存在が確実視され、また長居公園通は磯菌津路に比定されているなど、歴史的に重要な地域である。上町台地の東斜面に立地する当地一帯が、河川の変遷を含めてどのように地形的な変化をたどり、それに対して人間の活動がどのように係わったのか、今後の調査によってより一層の情報を得ることが重要である。

引用文献

- 市川 創2011、「考古学からみた中世四天王寺とその周辺」：『寺社と中世都市－京都・博多・大坂－』（「大阪上町台地から都市を考える2」シンポジウム発表資料） 大阪文化財研究所、pp.3－11
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会
- 1987、「山川邸新築工事に伴う田辺東之町遺跡発掘調査（TH85－4）略報」：『昭和60年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.77－83
- 1988a、「谷口邸建替工事に伴う田辺東之町遺跡発掘調査（TH86－1）略報」：『昭和61年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.94－97
- 1988b、「安井邸建替え工事に伴う田辺東之町遺跡発掘調査（TH86－5）略報」：『昭和61年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.100－104
- 2000、「浪速短期大学による建設工事に伴う確認調査（YT98－1）」：『平成10年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.93－99
- 2003a、「難波大道跡発掘調査（ND01－6）報告書」：『平成13年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.103－105
- 2003b、「酒君塚古墳発掘調査（SA01－2）報告書」：『平成13年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.113－118
- 大阪市文化財協会1987、『府営矢田部住宅第2期建替工事に伴う矢田部遺跡発掘調査（MN86－41）略報』
- 1998、「田辺東之町の調査」：『桑津遺跡発掘調査報告』、pp.269－284
- 1999、「矢田2丁目所在遺跡の調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告』1997年度、pp.49－52
- 川西宏幸1978、「円筒埴輪総論」：『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会、pp.95－164
- 九州近世陶磁学会2000、『九州陶磁の編年』
- 建設省国土地理院1983、『土地条件調査報告書（大阪平野）』
- 小山正忠・竹原秀雄1970、『新版 標準土色帳』 日本色研事業株式会社
- 佐藤 隆1992、「平安時代における長原遺跡の動向」：『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ 大阪市文化財協会、pp.102－114
- 1996、「中世後期の陶磁器・土器について」：『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告』Ⅰ 大阪市文化財協会、pp.81－92
- 新修大阪市史編纂委員会1988、『新修 大阪市史』第1巻 大阪市、pp.70－74
- 菅榮太郎1995、「石鏃資料の型式および製作技法の編年的検討」：『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ 大阪市文化財協会、pp.367－388
- 高橋工2010、「奈良時代の橋と難波京」：『上本町遺跡発掘調査報告』Ⅰ 大阪文化財研究所、pp.67－71
- 堀田啓一1979、「古墳時代の大阪」：井上薫編『大阪の歴史』創元社、pp.75－104
- 文化庁文化財部記念物課2010、「土層の認識と表土・包含層の発掘」：『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編－』同成社、pp.93－116
- 平凡社地方資料センター1986、『大阪府の地名』（日本歴史地名体系 第28巻） 平凡社
- 森島康雄1992、「畿内産瓦器碗の併行関係と年代」：『大和の中世土器』Ⅱ 大和古中近研究会、pp.113－117

**Archaeological Report
of the
Location B of Yatabe Site
in Osaka, Japan**

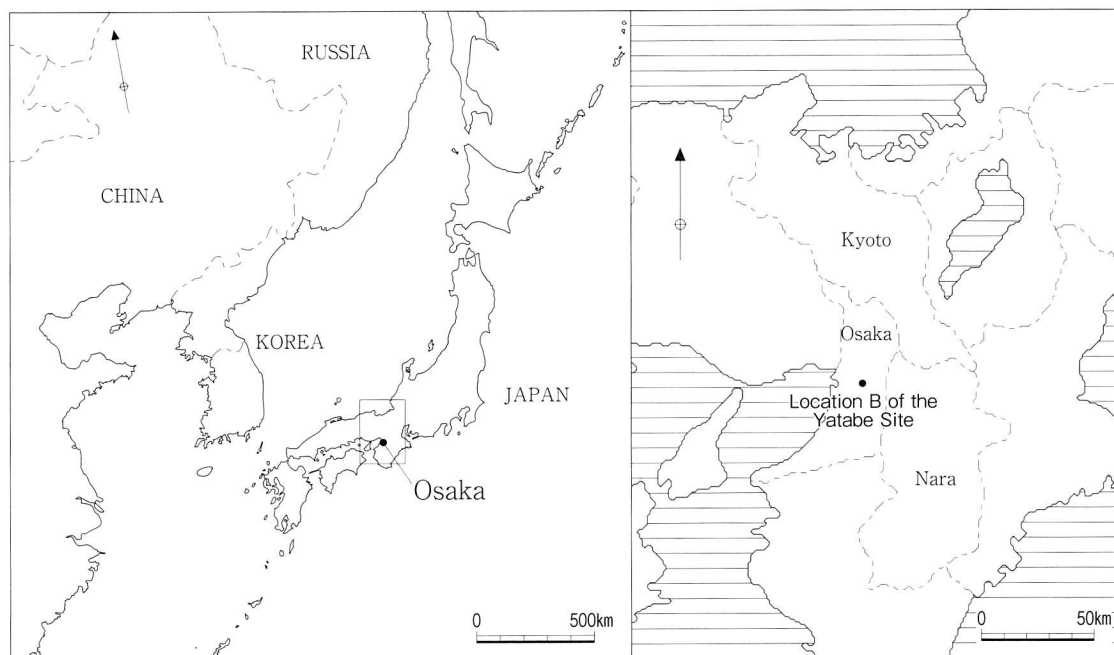
March 2012

Osaka City Museum Organization
Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text.

NR: Natural river
SD: Ditch
SE: Well
SK: Pit
SR: Paddy field baulk
SX: Other features



CONTENTS

Foreword

Acknowledgement

Explanatory notes

Chapter I	Progress of research and publication	1
1)	Background of research	1
2)	Methods of research	1
3)	Progress of research	2
4)	Progress of report making	2
Chapter II	Geographical and historical surroundings of the site	3
1	Geographical surroundings	3
2	Historical surroundings and preceding investigation.....	4
Chapter III	Investigation results	7
1	Stratigraphy	7
2	Features and finds	10
1)	Features and finds from the middle Kofun to the Ancient period	10
2)	Features and finds of the Medieval period	10
3)	Features and finds from Tokugawa and Meiji periods	15
4)	Finds from each stratum	18
Chapter IV	Conclusion	21
References and bibliography	23
English contents		

報 告 書 抄 録

ふりがな	やたべいせきびーちてんはつつちょうさほうこく							
書名	矢田部遺跡B地点発掘調査報告							
編著者名	市川 創・白川靖祐							
編集機関	財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所							
所在地	〒540-0006 大阪府中央区法円坂1-1-35 TEL.06-6943-6833							
発行年月日	西暦 2012年3月9日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やたべ 矢田部遺跡 B地点	おおさかしひがしみなみよしく 大阪市東住吉区 やたべいっちちうめ 矢田1丁目	27121	-	34° 36′ 32″	135° 31′ 43″	20100701 ～ 20100823	360㎡	遺跡内容の 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
矢田部遺跡 B地点	田畑	中世		畦畔、自然河川		土師器・瓦器・瓦質土器・瓦		
		徳川期		自然河川				
要 約	本書は、矢田部遺跡B地点において実施した発掘調査の成果を報告するものである。 調査では主として古墳時代中期以降の遺構・遺物を検出し、当地が耕作地として継続的に利用されたことを明らかにした。また、こうした耕作地としての利用と密接に関係する各時代の溝・流路を確認することができた。							

原 色 図 版



版 图

調査区北壁地層断面
(南西から)



調査区西壁地層断面
(東から)



深掘り地層断面
(北から)





第7・6c層上面の遺構
(東から)



SK704
(東から)



SR6c01・02
(南西から)



第6層上面の遺構(東から)



SR603～605(北東から)



NR401(南から)



SD402~404(南から)

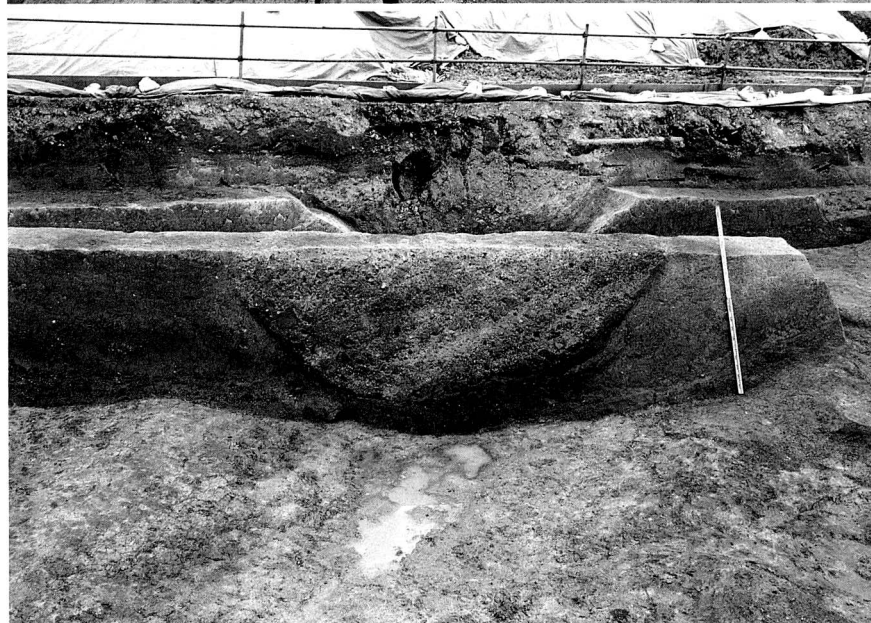
第3層上面の遺構
(南西から)

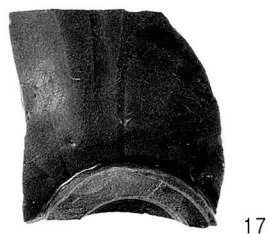
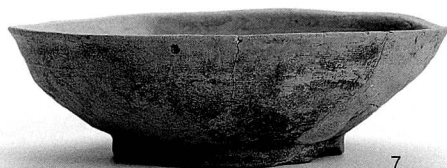
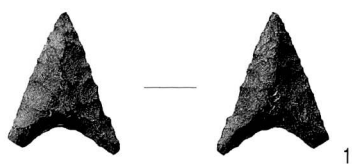


第3層上面の遺構
(東から)



SX201断面
(南から)





SD703(1)、NR401(7・13)、NR301(17・19~21)、第6b層(31)、第4層(32・33)

大阪市東住吉区 矢田部遺跡B地点発掘調査報告

ISBN 978-4-86305-063-1

2012年3月9日 発行©

編集・発行 財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

<http://www.occpa.or.jp/>

印刷・製本 アインズ株式会社 大阪営業所

〒541-0056 大阪市中央区久太郎町2-5-31

**The Archaeological Report
of the
Location B of Yatabe Site
in Osaka, Japan**

March 2012

Osaka City Museum Organization
Osaka City Cultural Properties Association